

迷路の奥の絶品

「何やそんです、かあ」

ミニカーパーが停つて、ドライバーの音がした。つぎ道を探ねられたのかと思つた。そちらを見ると、近くのクリエックの先生だった。

「もうすぐうちの店も十三年になるんですが、車や来る人がまだ道に迷つちやつてね、電話で尋ねてくるんですよ、だから看板立ててるんです」

レストランの主が言った。

「ふううんそうですね、往診の途中から、またね」

カーパー先生もわたしもそのレストランのご真顔同様だが、先生は、それ以上深入りせず過ぎて行つた。

件の看板には、『ここを左折(右手の人差し指をのばした絵)あと二〇〇m』と書いてある。先生は、お仕事でなければ、ふううんの後に「やったね、これがあれば、苦労しないでおいしいもの食べられるよね」と言ってくれた筈である。

看板には偽りないのだが、この二〇〇mの間がドライバーは泣かせなのだよ。だいたい、レストランといえは、街路樹の間に間にアンティークな外燈の灯が揺れていて、もうやんこ進めはお目当てに到着ひきると、ドアを押して中に入れば、こゝ馳走の雰囲気浸れるというものである。それが違う。

看板の二〇〇mは極細の道で、まず上つめの丁字路、それをまっすぐ行くと小さな十字路がある。どちらも直進すればいいのだが、ドライバーはその角で迷う。除行しながら進むと広い駐車場で、やれやれゴール。やったあという塩梅なのだ。

市でこの店の名を知らぬ者はまずいなと思つた。景外からありピーターも多いいさうだ。シエラは十三年も道を迷わせながら、グルメの舌を育ててきた。迷子になつて電話してくると

「あ、かとうごさいます、畑に沿った狭い道を曲がってその奥にある当店へようこそ、絶品をご用意しております」

というわけだ、広い迷路を悠々と走りきても、この看板を見過ぎず
曲がり角を見落しときないことが決め手なのだ。まるで簡單
には絶品に舌鼓は打たせないというように。

一般的に茅ヶ崎の道は、狭い、曲がっている、行き止まりがある、
最悪の時は車はバックする要領で戻す来なければならぬ。
この市に古くから住む者は、土地柄だと思ひ、気にはしていない。
雰囲気があるといひが、翹きがあるともいひ言っている。

そんな中だから、宝探しのようなレストランがあつても、あき
れる話ではない。食の文化は、心なれしまうか、はたまた、
迷路を辿るも通う味かである。そこはグルメが決めることか
もしれないが、十三年以上 十四・十五年と 見頭肩が増えれば頼
もしい。

ところで、看板が立っている場所は、迷路でもなんでもない。
わたしの家の庭の片隅である。広い畑の真向いで看板には
うすつけの場所をみたさうだ。わたしも喜んで作業を手伝っ
たというわけだ。

看板は「茅ヶ崎」立ち上がって、
あとは「パー」先生のお保養の
一言を待っている。

茅 幸子

二〇一三・二・二八